鈴木威一郎（スクールリーダーシップ開発専攻）

将来を担う生徒として向き合う

1. 教育を考える一言

「生徒指導というのは，今いる生徒の行いを観て指導するのではない・・・
その生徒の 5 年後，10 年後を見据えて指導することが大切だ・・・
5 年後，10 年後のその生徒と関わり合う気持ちがなければ生徒は振り向いてくれない・・・」

2. 背景

教育実習中の出来事。大学 5 年次 4 年生の時，私は母校で教育実習を行う機会に恵まれました。幸い，在学中にお世話になった恩師がほとんどいらっしゃる環境の中での実習でした。期間中，いろいろな先生が昼食に誘って下さり，その際の会話では，教育観について多くの刺激を受けました。

特に印象的だったのは，私が高校 3 年の時に教わった先生の一言です。その先生は，私とは別の農業高等学校を卒業しており，また，大学の先輩でもあることから，共通項の多い先生でした。その先生は，当時の農業の先生としては珍しい，決して「威圧的」ではなく，生徒に寄り添いながら共に歩んでいく（生徒と同じ立場に立ってはいるものの，時として，イイカゲン）ような「寛容（？）な先生」でした。

その先生が注文した昼食を待っている時，「指導が困難な生徒に対する支援のあり方」について質問した時，力強く語って下さった言葉です。

3. 考察

私が学んだ高等学校は，学区内でも学力的に最低のランクであり，少子化が問題になっていなかった 25 年前には珍しく，定員割れを起こしていた公立学校です。中途退学者も多く，隣のクラスは半分以上が 1 年の夏休み前に学校を去っていく有様でした。制服の改造，教室での喫煙，盗難，先輩からのカンパ・登下校のバスや電車の椅子確保，中型バイクによる暴走行為は日常的な光景でした。そのような学校であったためか，生徒たちを統制するために，ほとんどの先生は「威圧的・挑発的」で，問題行動を起こしうるような困難を抱えた友人たちへの配慮や支援，共感は一切ありませんでした。私は，そのような先生たちを，当時反面教師的に感じていました。

「本当に，学校を去っていった友人たちへのアプローチは，“退学”というカタチでしか表せないのか・・・学校（教育）って何だろう・・・」という疑問は，当時から現在にかけて私に課せられた課題です。

そのような疑問の中，現れた「寛容な先生」の言葉や存在は，もしかすると，現在の私の教育観を支えているのかもしれません。